
詩集 ~ 気分のままに書かれるもの ~

稻波 緑風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩集～気分のままに書かれるもの～

【Zコード】

N5170W

【作者名】

稻波 緑風

【あらすじ】

気ままにつづられる詩をまとめてみた

世界に反対してゐる言葉が一番敵だった（前書き）

言葉つて難しこものですね

世界に反逆してみると言葉が一番敵だった

エグエンティファルト
イストアトリアス
リンミグランドバリド
キクルウイストアビ
シジユグディアリサ
トブガムンド
ジブルグ
タトコミバロヌス
シシアグアランザ
ドンドバルンド
ジジガンブルフ
シアルコーフィ
ルアルオプコート
ジェンヴェドウ
ガゴデアクウシイ
フブルミユスユピング
ただ言葉の羅列

何を読み取るかは個人の自由
初めは言葉も記号の一つでしかなくて
読み取るのに時間をかけたに違いない
だから今も言葉は難しく
人間と人間の間を行きかつて
時折 どこかに行ってしまうんだ
そんなことはないなんて
誰も言えないよ
だつてそれなら
宗教がここまで大きくなることも

企業があふれることも
組織ができあがることも
天才が生まれることも
学校があることも
なかつたに違いない
疑問に思うのは
うまく言葉が来なかつたせいだ
だから世界の物事にも
疑問があるんだって
気づいてしまつたに
違いないんだよ

世界に反逆してみると言葉が一番敵だった（後書き）

自分との戦いが一番の地獄です。

でも、それが一番やりがいがあるんじゃないかなあ。

他人とのやり取りがつらい日々の中の作品です。

ただ、現実逃避したいだけなんですね。

2011/09/07

僕は僕で　君は君で

「なんだって、そう同じことを繰り返すんだ?何度もやるなと」
「たよな?」

罵声ではなく淡々と諭すような口調

「学んでないんじゃないかって、周りに言われても仕方ないぞ?この調子なら」

諦めのようで　ただ事実を告げているだけのよう

「少しばかり直していこうな」

お人好しと言われるような会話の終わり

「あの人真似は僕にはできない。何度も間違える」
諦めの独白 悲しみはない

「でも、みんなにはわからない。僕はちょっとだけつまくなってる」
ただの事実確認 自分に言い聞かせる

「気づいてもらえるまで、頑張ってみよっ」

ちょっとした目標 わざいな決意

「ねえ、なんでこんな隅っこにいるの?」

純粹な疑問 自分ではないことへの興味

「誰がどこにいようがお前には関係ない」

ねじ曲がった回答 他人との大きな距離

「どうかけがしたの?」

無知ゆえの寄り添い

「あっちいけ 近寄るな」

温もりへの拒絶

どうやつたつてみんな同じ人間にはなれないんだ
なのにそれを忘れてしまう

覚えていたつて自分と違う考え方なんか浮かばない

なんて不便なんだろう

生きていくのが難しいんじゃないと思つ

みんながみんな

自分の考えだけで生きているから
大変なだけなんだよ

僕は僕しかいなくつて

君は君でしかなくて

それ以外の何物でもないのに

僕は君を僕だと思って

接しているつて

僕はわかっているのだけれど

僕は僕で　君は君で（後書き）

自分のやりたいことを貫き通せる人がうらやましいと思つ
他人に優しくできる人をすばらしいと思つ

だから、どちらも妬ましい

でも、人は人 皆 他人

そう割り切れればいいのにと思う

2011/09/

10

とまどいに似たため息

とまどいに似たため息
深呼吸よりも深い呼吸
廃墟の中にたたずむ時計
時は刻み続けられる

太陽の逆転

月の公転

溶け出した蜜が
火を追いかける

眠るものなし

ため息の視覚

拡張されし空間

努々忘るるな

木枯らしは春一番に変わる

進化せし時間

退化せし人間

恐ることを忘れ

畏ることを忘れ

笑うことを忘れ

嗤うこと忘れず

一種類のものになる

個は持たず

衆は持ち

何を持つて

未来となすかも知らず

盲目の老人が

国の舵をきる

聾啞の若者が

眠りをむさぼり

誰も満足なものはなし
動かざるもののみ知れり

急けし者のみ知れり

稀有なる道をみすえ

歩むすべを知る

風が吹き荒れし稻穂の海の上
雲がごとく踏み荒らす

何を持ちて生く

疑問すら持たぬ旅人

清々しき水を飲む

濁れし川の上側

幻の感覚

必要以上のものを求め

命は容を留めず

死して後

名は決して残らず

欲望の道を歩むこと

安きことほかならず

理性の道を行くもの

神が手也要らず

見るは光のみ

掲げし歌唄は闇

すべてを持ちて

畏ることを知る

心は闇

されど理性の道行くもの

手は光

彼らにはただ命のみ

それは死して後も名を残す

迷いも間違いも
彼らは楽しむ

じめに似たため息（後書き）

すみません、手抜きをさせていただきます。
2009/03/13に書いたものです。
加筆修正一切してありません。

生きている自分に疑問を抱く

なぜ私のような無能者むのうしやが
この美しき世界に息づき
この人生を永ながらえているのだろう

なぜ私のような落伍者らくいじやが
この素晴らしい世界に息づき
この時間を得ていてのだろう

祝福を受けている人が多くいる中で
なぜ私にもその欠片かけらが
受けられるのだろう

もしも「私が神だ！」と叫んだならば
私の意思通りに世界は動くというのだろうか

死んでしまえばいいと思つ
そんな考えににうなずく人も居よつ
しかしこんな愚おろか者にさえ
「死ぬな」という人がいる
その言葉にとらわれて息をする

なぜ私のような無力な人間が
この優しき世界に息づき
この彩りの一片いっぺんに属していのだろう

時は刻み続ける 一瞬も止まることなく
無も有も半端はんぱにあつて

完璧なる調和をなす

なぜ私のような異端者が
この麗しき世界に息づき
この正常に浸つて いるのだろう

私は何者なのだろう
生きているのだろうか
自問するものに正解など見いだせない

生きてこる自分に疑問を抱く（後書き）

このような考えはありでしようか？

「ない」というのであれば、私は心安らぐでしょうか？
いいえ、このような考えをもつて私は私であるのです。

否定の考え方を聞いても、肯定の考え方を聞いても、
私はなんら変わらないでしょう。

それが「私である」と知っているのですから

この詩は一度消えてしまったものです。

完全に再現されたものではありません。

しかし、作者は同じです。感情は同じままです。

なので、消えてしまった詩がこの詩とかけ離れたものではないこと
だけ

知っていてください。

これが、今の私の考え方なのです。

11/09/13

花咲く町の片隅に（前書き）

ある地方紙に投稿したものです。ちなみに掲載はされていません。

花咲く町の片隅に

花咲く町の片隅に
小さな少女が一人居て
虹架かる町の少年に
愛とはいえない想いを抱いていた

虹架かる町の中ほどに
小さな少年が一人居て
星降る町の少年に

友情以上の想いを抱いていた

星降る町の片隅に

兄たる少年が一人居て
妹たる少女と弟みたいな少年を
真綿みたいな愛情で守っていた

花咲く町の片隅の

少女が乙女になつたとき
虹架かる町の中ほど
少年だつた青年と一緒になつた

星降る町の片隅の

兄たる少年だつた青年は
町一番の綺麗な乙女と
幸せそうに見守っていた

花咲く町の片隅に（後書き）

えつと、今回も手抜きです。すみません。

2011/07/06

悲観的思考の特徴は心に暗く暗く落り込む

失敗をした
自分はダメなのだとなじる

間違いをおかした
自分は最低なのだとのしる

一挙一動
いっきょいぢゆう

無駄なものに思える

自分はいらないものなのだと
自分勝手な感情が
心を覆い尽くして

暗く暗く沈む

暗く暗く沈む

痛い思いをすればいい

カツターやハサミと

鮮血のイメージ

悪くなつていいくばかりの現実
声を張り上げなければ

何一つ変化などおきることのない現状
奇跡などは奇跡でしかない

暗い感情
死か罪か
罰か生か
選択することもできない

弱いだけの自分

終わりなど

訪れはしない

恐れは自分自身で

乗り越えることしかできなくて

謝罪しゃざいや感謝かんじなど

声を上げればいいことだ

それらをできないというのは
自分がしたくないからだけで

でも それは恐怖

暗く重く体を動かすのさえ

いやになる

逃げ出してしまいたいのだ

本当ならば

それでも

逃げ出さないのは

ここで逃げ出してしまつたら
自分が変わることがないと
どこかで理解しているからで

たつた一言

それだけが重くのしかかる

口に出せないのだ

自らのおじつの感情のせいで

くだらない誇りなど

捨ててしまえばいい

それでも

捨てられないのは
自分が弱いことを認めたくないからで

温かい「ゆりかご」のような
居場所があつたから

そこからまだ

抜け出せていない

言い訳をするならば

どうして「抜け出せ」というのだらう

「夢を捨てずに

やりたいことを追い

それでも現実に向き合へ」という

そんな矛盾した意見に

従えるほど器用じやない

だからいまだ「ゆりかご」を求める

戻れないと知つていて

戻つてはいけないと知つていて

現実から逃げたくなつて

進みたくなる場所は

ゆりかごの中で

そこはもうなくなつてしまつだらうに

私は手を伸ばす

気づくのが遅すぎたのだ
そこでどれだけのものを得たのか
そこでどれだけ自分であつたのか
気づくのが遅すぎたのだ

もう今は現実の中で

自分をなじり

自分をののしり

逃げたくても

逃げてはいけないという戒めの中に

息づいて

永らえて

鮮血のイメージを恐れて
体をすくませることしか

できないのだ

ひかんてき

悲観的思考は死をもこえ
生きる地獄を作り出す

その思考から抜け出すことにも
大事ではあるけれど

なぜ樂観的思考になれるのか

私にはわからない

悲観的思考の特徴である心が暗く落胆する（後編）

暗い詩ですみません。

現在落ち込んでいる最中ですか、そのまま文に出てしましました。

2011/09/15

今生の価値観の致命的なことと付箋《ふせん》の貼《は》られた人生という線

何か書こうとして
何も浮かばない時がある
そんなとき頭の中では
喜怒哀楽と記憶が
ぐるぐると
出たり入ったり
ごちゃまぜになつて
駆け巡る
そんなものだから
時には気分が悪くなり
時には気分が良くなり
時にはふさぎこみ
時にははつちやける
突然に
とうびょうし
突拍子もないことを
しでかして
何をしているんだろうと
自問する
感情に振り回されて
疲れ切ってしまう
それでもなんとか
文字を浮かびあがらせてみると
とても断片だんぺんでしかなくて
文章にならない

感情や想いのままに
書こうとする

どこか言葉がずれていく

心が動く速さに

言葉が追いつかないのだ

いや違う

心の動きに見合つた言葉を

私は知らないのだ

だからとても

よわよわしい

言葉の羅列われつが

出来上がる

そう

羅列でしかなくて

意味をなさない

文章になる以前の問題

言葉が一切の意味を

持たず

記号でしかなくなつてしまつている

愛情への傾きがやつてきた

誰かに一つ傾いているのではない

私は私にしか向けてない

悲觀への傾きがやつてきた

無能・無力・無知

無だけが飛び交う

どこか壊れてしまつているのだろう

そうでなければ

これが正常だとでもいうのか

私の思考は

ぐちゃぐちゃになつて

ばかりになつて

こなじなになつて

よわよわしい

言葉だけに支えられて

結論はやつてこない

終わりも始まりもない

すべて続き

なにかを成り立たせるためだけに

息をして

自分は何かのつなぎでしか

ないような錯覚に

陥る

そんなはずがある訳がないといつこの

今生の価値観の致命的ないと付箋《ふせん》の貼《は》られた人生という線

何を書いていいでしょうか・・・
すみません。自分自身がちゃんと理解して書くべきなのでしょう。
しかし、書くことを楽しいと思わなくなってしまうと、まったく書
けなくなるのです。

こんな言い訳はしないほうがいいのかもしません。

201

1 / 09 / 17

心軽やかに跳ね上がるも湧き出る恐怖

物の使いようなどすべては考えられぬ
色の名などすべて覚えられぬ
それでも

この心に浮かんだ名は
この心に浮かんだ使い方は
この心に羽をつけ浮かばせる

手に取りてひと息
眺めてみてひと息
至福のひと時

ぬくもりもすべてはわからぬ
寂しさもすべてはわからぬ
それでも
この心に入ったぬくもりは
この心に入った寂しさは
この心に喜びを注ぎはすませる

味わいてひと息
感じてみてひと息
幸福のひと時

ただ
別れのつらさが忍び寄る
我慢の痛みが突き刺さる
続かない幸福が寂しくなる

心踊りて

飛び回り

ああとため息

喜びの

嘆きの

驚きの

別れの

ああとため息

そして

心立ち止まり

至福のなくなつた

寂しさに

恐怖し

嘆く

ああとため息

大きくため息

心軽やかに跳ね上がるも選せ玉る恐怖（後書き）

楽しい時間は過ぎてこられまく。
さびしくなる時間がやつてきまく。

でも、それもまた振り替える楽しみの時間なのだと思えば、楽しい。
思い出のきっかけは、思い出の唄。 2011/09/19

苦しみはすべて口の内から溢くあふれ出るもの

恐怖に押しつぶされながら

一人 孤独の戦いを始める

未熟ゆえに真つ白

未熟ゆえに真つ黒

何もないのだ

何を心に留めて

立ち向かうのだろう

何もわからぬ

一挙一動

すべて尋ねてみればいいのだろうか

歪んだ感情と

ねじ曲がった意識とが

現実に相対することを

困難にさせる

誰もが通つた道なのだと

己に言い聞かせようとしても

聞くことさえ拒絶するのは

自らの名前のせい

ただそれも言い訳に過ぎない

わかっているのだ

本当はどうしたらいいのか

それをしないのは

恐怖

それにつきる

一挙一動に
おびえて生きる
そんな毎日が
過ぎていく

いつまで
続くのか
現実と夢との
争い
私は何をしているのだろう

#おひさますべての日々から溢《あふ》だ出るもの（後書き）

読みていただきありがとうございます。
2011/09/20

泣かずにして心が嘆きの叫びをあげる

会えない

会えた

聞こえない

聞こえた

触れられない

触れられた

ゆらゆらと心 波打つ

好きだから?

嫌いだから?

一人だと

強く思う

孤独ではないのだと知つても

一人ではあるのだと知る

届かない声は

呑み込んでいるだけで

届けようとしてない声が
音になるはずがなく

ゆらゆらと心 波打つ

泣いているから?

笑っているから?

子供だと

強く思う

子どもではないのだと知つても
無責任ではあるのだと知る

聞こえない声は

耳をふさいでいるだけで

聞こえとしない声が

音となるはずがなく

好きつていう心も

また偽り

泣かずして心が震わぬ言ひをあざる（後書き）

ちよつと、心じりてあります、です。

2011/09/23

矛盾に躍る日常

生きたい
死にたい
泣きたい
笑いたい

矛盾に貫かれた価値観
そしてこの感情

誰しもみな矛盾を抱えて
生きていることは
わかっている

それでも

自分にかなうものは
いないのではないかと
騒る

美しい
醜い
強い
弱い
苦しい

矛盾を抱えていることは

それでも

“普通”ならば

気にしないだらけ

矛盾に惑わされて
振り回されて
どちらかを
捨て去ることも
切り捨てることも
できずに

生きているところと

その中で
どうしても
愛したい
そんな人がいる
でも
その人を
殺したくなるほど
憎んでもいる

“普通”にありたい
でも今は矛盾に従つ
愛しているのは
本当だから
ただ心が否定しない
殺したいと思ひ憎しみ

ただ
殺して終わるのならば
生きる必要もないので
生き続けて苦しみを

「与えることのほうが
まだ自分の憎しみを
すべてぶつけているのでは
そう思う

そう生きていって
でも死んで?
そんな矛盾と
生きたいと
死にたいの
矛盾

天秤てんびんが

傾いたときは
気をつけてね
何をするかわからないから
それでも
世界がある限り
天秤が地につくことが
ないよう
頑張るよ

この先をまだ
見ていたいから
この先をもう
見ていたくもないのだけれど
矛盾してゐるから
どうかで
断ち切れる準備だけは

しておいつ
そつすれば
矛盾に
少しは勝つてこるような
気がするから

矛盾に翻る日常（後書き）

まとまつていなくてすいません。

2011/09/23

夢

私は夢を見る

何かから逃げている夢

誰かと話している夢

戦場にいる夢

日常と同じ夢

夜に目を閉じ見る

私は夢を見る

話を作り人に伝える夢

故郷を多くの人に伝える夢

農林水産業を活性化させる夢

人と人をつなげる夢

昼夜に心を広げ見る

私は夢を見る

夢の話を伝える夢

夢を現実にする夢

夢がそのまま夢

夢とならない夢

昼夜問わずに見る

私は夢を見る

泣くために

笑うために

怒るために

明日のために

昼夜の支えに見る

夢を見て

夢に楽しみ

夢に走り

夢に漫り

夢で遊び

夢で進み

夢をあきらめる

私は夢を見る

夢が夢であることを知りながら

私は夢を見る

昼も夜も夢の中にいるよ、

私は夢を見る

息をする目的でもあるよ、

私は夢を見る

夢が夢でしかないことを知りながら

私は夢を見る

私は夢を見る

夢が夢である限り

それを追うこと

やめてはいけない

そう思いながら

私は夢を見る

私は夢を見る

夢（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

2011 / 09 / 24

雲

もくもく
もくもく
もくもく
もくもく
もくもく
もくもく
もくもく

空に浮かんで

もくもく

もくもく
もくもく
もくもく
もくもく

雨を降られせて

もく

もくもく
もくもく

形がきて

僕はほほ笑む
あれは犬かな？

あれは熊？
あっちはハート

もくもく
もくもく

今日は片隅に一つ

今日は空いつぱいに広がつて

今日は空のあちらこちらに形があつて

もくもく

もくもくもく

風がいたずらするから

形がくずれちゃう

風が優しいから

太陽を隠して

影を作つてくれる

もくもく

もくもくもく

雲

くも

明日はどんな形があるかな?

明日はどんな色にそめられるんだろう

雲（後書き）

昼間の雲と夕方の雲は雰囲気が違います。

太陽の位置で色がつくからだと思っています。

・・・ただ、気分の違いでしょうか？

読んでいただきありがとうございます。2011/09/25

よみがえりし者の鐘

若者たちが戦場へ向かつた
ひとりひとり家族と離れて
強欲な権力者の命令のもと
領土を広げるために始めた
戦場へとかりだされていった
戦場へと向かう道すがら

若者たちは満足な食事もできなかつた
長年の戦争で疲弊した国に
兵士に配る食糧があるはずなかつた
強欲な権力者のもとに
隠されているだけで

国に出回るはずがなかつた
だから若者たちは休憩のたび
食べ物を探し道端をあさる
だがもう食べ物など見当たるはずもなく
空腹を抱えて戦場へ行くしかなく
飢餓きがで亡くなる兵士があれば
その身は道端に置き去りにされ
荷物のみ仲間に奪われる
病を患えばやはり置いていかれ
荷物は奪われる

孤独のまま苦しみ逝く
戦場では毎日死と苦しみと痛みとに追われ
空腹のまま時が過ぎる
敵国では食べ物があるらしい
と噂が流れた

毎日毎食満足に食べられるらしい

と噂が流れた

同じように戦争で疲弊しているのではないのか
と疑問を抱けるものさえ現れないほどに

飢えた兵士たちは

自國を捨てる計画を立てる

夜毎 将たちが飲む酒の匂いを恨み

焼きあがる肉の匂いに苛立ち

兵士たちはただ地に伏していく

ある晩 見張りの兵士は飢餓に倒れた

敵国はそれを見逃さず

陣は襲われた

将たちは兵士を鼓舞し

戦わせようとするが

飢えに飢えた兵士たちには

立ち上がる余力さえなく

あっけなく戦いは終わつた

兵士たちは敵国の兵士に

ふるまわれた食事を喜び

亡くなつていつた友や仲間を

今更ながら悲しんで弔つた

そのときはまだ町に敗戦の報など

届くはずもなく

町に残る者たちは

親 兄弟 夫 友達 を想い

終わりの見えない戦乱に眠れない夜を過ごしていた

そこに響く鐘の音

うれしそうに

幸せそうに

町の鐘が鳴り響いた

そしてどこからか聞こえる声

その声は誰の声と言えないほど
さまざま声が混じっていた

「戦争は終わった」

そう叫ぶ声がどこからか町に広がった

人々は鐘の音とともに喜びに沸いた

勝敗などはどうでもよかつた

人々は戦争に疲れ果てていた

権力者の欲望にもう抗う気力さえなくなるほどに
だから声に 鐘の音に

人々は夜という時も忘れ喜んだ

同じように声を聞いた権力者はおびえた

どこかへ逃げ出そうと必死になつて

金目の物を集めようとした

権力者はわからなかつた

すべて人にやらせていたから
自分の家のはずなのに

どこに何があるのかわからなかつた

召使いたちはみな知つていた

だから平等に全部をわけて

権力者の家から逃げた

町へ帰つて家族と仲間と

すべてを分けて

新しい生活を探すために

一晩中鐘は鳴り続けた

人々は権力者をとらえた

少数の人間の欲望に

もう自分たちの生活を脅かされることのないようにな
人々は晴れやかに笑つた

空腹ではあつたけど

兵士たちの無事がわからない不安はあるけれど

でも今戦争は終わり

権力者もただの人になつた

だから悲しさも寂しさも空腹もあるけれど

うれしかつた

喜びに踊りまわれるほどに

鐘の音が朝日がのぼるとともに止まつた

ふと誰かが空を見上げて言つた

「鐘を鳴らしていたのは亡くなつた兵士たちだ」と

亡くなつた兵士たちもうれしかつたのだろう

もう苦しみの中にいる人々を見続けることがなくなるから

だから戦争の終わりを告げるために一晩だけよみがえつてきたのだ

るう

そう人々は話し合つた

町の鐘がなる

今度は亡くなつた兵士たちの弔いのために

戦いのねぎらいと戦争の終わりを伝えてくれたお礼のために

人々は一日中鳴らし続けた

道に水をまき

空に水をまき

食べ物がないことを謝りながら

花をまき

花をなげ

弔いとねぎらいとお礼をこめて

戦場へ向かつたすべての兵士に

亡くなつてしまつた兵士たちに

町の人々は鐘を鳴らし続けた

そして鐘の音にあわせて唄つた

弔いを

感謝を

ねぎらいを

祈りを

幸せを

嘆きを

さまでまに唄つた

亡くなつた兵士に届けと

時が流れ

町の鐘が一日中鳴る日が年に一度

あの弔いの日

いわれを忘れても

話が断片にならうとも

前の晩に誰が鳴らすのか分からぬ

鐘の音にこたえるように

一日中町に響き渡る

その町の鐘は「よみがえりの鐘」といわれ

誰が鳴らすのかわからぬ夜の3回の鐘の音に

どこからか聞こえる多くの人の歎声が

その名にふさわしく年に一度訪れる

よみがえりし者の鐘（後書き）

2011/09/26

私は立つ

立ち上がれ！

どこまでも孤高じこかうの人であるために！

立ち上がれ！

何者なにものにも屈くつしない柳やなぎであるために！

だがしかし

仲間を持ちてほほ笑め

だがしかし

膝ひざをつきてくやしがれ

受け入れて拒め

拒みて受け入れよ

ほほ笑みて怒り

怒りてほほ笑め

手に握りしめるものは

自らであれ

誰かのためなどと

言い訳あいわけをしないように

己おのれであり続けよ

時に人に屈しようとも

立て！

さすれば見えよう！

うずくまりし時に見えなかつたものが

座れ！

さすれば見えよう！

立ち続けし時に見えなかつたものが

我は我であつてほかの何者にも

なれやしない

他たは教師であり

他は鏡であり

他は我ではない

だからこそ

我は我でありえている

進め！

壁や谷など本当はない！

進め！

道など分かれてはいない！

進め！

見ているものこそが正しい！

進め！

裏切りにあつて信じよ！

進め！

己が己であるために！

ただ

壁や谷にあつのはそつ思つからで

ただ

道が分かれて見えるのは迷つてゐるからで

ただ

見えていないものを信じてもそれが言い訳になるからで

ただ

裏切れられなければ信じていたとさえ人は気付かない

ただ

己でなくなつてもかまわない

泣くがいい

怒るがいい

おびえるがいい

それらは糧かてになろう

笑うがいい

あきらめるがいい

自信を持つがいい

それらは力になろう

さあ

我は立つ！

続け！

私は立つ（後書き）

ただ、個を大切にすることとは、もう刃の剣にも似ています

2011/09/29

秋の一幕《ひじめ》

ひら はら ひらつ
はら ひら はらり
風がゆすって落ちた
紅葉した葉

ざわ ざわ ざわ
がさ がさ がさ
まだ落ちない葉が
風にゆすられて声をあげる

とて ぽて ぽとん
とす ぼす ぼとん
重くなった木の実が
落ちる音

かり こり かりり
こり かり こりり
動物たちが冬 眼前に
あちらへひらくで食事中

かしゃ くしゃ
くしゃ かぢや

落ち葉を踏んで歩く
乾いていたり湿っていたり

そわ そわ
そわ そわ

影が長くなつていく
寒さが忍び足

する する する
する する する
夕方の西空
秋の日のつむべ落とし

秋の一幕『ひとまく』（後書き）

2011/10/02

「ごめんなさい」もありがたい

「ごめんなさい」
すみません
謝れない私
言葉に出せない
だからどんなことにも
ごめんなさい
声にならないだけで
心の中で叫ぶ
そして
そんな自分が嫌で
いつもいつも
ごめんなさい
すみません
声に出したいのに
どんなことにも
誰であっても
声に出して謝らなきゃ
でも
言えない
勇気を出して
親友に
「ごめんなさい」
でも親友は首をかしげて
「謝られることは何もされてないよ」
ああ こんな親友がいてよかつた
勇気を出して謝った
それが報われたわけじゃないけれど

「ありがとう」って言えた
そんな小さな幸せ
味わうことができてうれしいと思つ

ありがとううなんて

言う必要なんてないと思つてた

だつてみんながやつてくれるのが当たり前
それのどこがいけないの？

お礼なんて言う必要ないじゃない？

今日も親友たちと一緒に

一人ぼっちの人間が馬鹿みたいに見える
友達が一人とか二人とか信じらんない
ありがとうとか

ごめんとか

そんなのそんなに必要？

わつけわかんない！

ま、関係ないか

群れている人間がわからない

なんで表面だけで付き合つてているんだろう

でも

私には関係ない

私はただ

ありがとうと

ごめんなさいを

言えるようになればいい

「あなたがこもあつがといひま（後書き）

「めんなこもあつがといひま。いえ、いひまは言へ
ます。

でも、どこかずれているんです。ずれてる自分が一番嫌いです。 2

011／10／06

書けない理由

書けない理由は
心がうるさく騒ぐから
仕事のこととか
寂しいとか
家族のこととか
恋愛のこととか
いろいろ考えるから
とめどなく思考が続いて
止まらない
でもなにより
食えて
食えて 食えて
食えて 食えて 食えて
食えて 食えて 食えて 食えて
食えて 食えて 食えて 食えて 食えて
食えて 食えて 食えて 食えて 食えて 食えて
貴方が傍にいなくて
傍に温もりがなくて
愛情に食えて
心が詰まる
だから言葉が足りないとかじゃなくて
言葉が出る余地なんかないほどに
愛情に食えているから
貴方を求めるだけになる

書けない理由（後書き）

お久しぶりです。 2011/10/27

さらば友よ

お別れの挨拶を君に

さらば友よ 愛した人

心 同じと幻想を抱いた私

苦しめただけ私も苦しめたなら

惜別の意を君に

さらば友よ 愛した人

心 苦しくなるのは私が寂しいと思うから
もっと多くの言葉をかわせばよかつた

届かぬ祈りを君に

さらば友よ 愛した人

心から君の幸いを願おう

風の便りに鐘の音を聞くまで

忘れぬ怒りを君に

さらば友よ 愛した人

心に留めおこう 君に見たものは私の行い
鏡のように映された短所

友情と人間と性別の愛を君に

さらば友よ 愛した人

心 すべてを傾けられないのは私が信じていないから
それは君だけに限つたことではない

憎しみと嫉妬を君に

さらば友よ 愛した人

心から君の才能に嫉妬し それを認めぬ君を憎もう
私には何もないだろう?

親しみと温もりを君に
さらば友よ 愛した人

君に寄り添う友達が新たな出会いを運びますように
君だけの幸せを手にして欲しい

自らの人生に誰かのためという言い訳をしないで
君が君のままであり続けることを願う
ひとときでも君の傍に居られたことが幸せ
さらば友よ 愛した人
寂しさと怒りに揺られて私は泣く

さらば友よ（後書き）

罪でしょうか？人を苦しめることは罰でしょうか？別れを悩むことは罪も罰もありません
現実だけがあるのでですから

読んでいただきありがとうございます

2011/11/

18

手を伸ばしてみて気付いた
私は独りが好きなんだと
他人を信じきれないから
どこかぎくしゃくしていく
他人を信じきるから
どこかぎくしゃくしていく
中間なんて存在していなくて
ただぎくしゃくする関係になる
恐怖と羨望によつて曇りガラスの眼鏡をつけたまま
他人に接し
否定と侮辱によつて城壁を築いたまま
自己に対する
反論と異論を知つても
それを信じきることができない
自意識過剰のままに生きてる
嫌な部分が増えしていくだけ

手を伸ばして気付いた
私は私が大好きで
私は私が大嫌いなのだと
努力しない人間にどんな価値があるだろうか
しかし終わりにしてはならない
時を止めてはいけないのだ
それは私が私に負けるとき
それは私が私を忘れたとき
それは私が涙しなくなつたとき
それは私が涙しなくなつたら
きつと誰かのためにという言い訳をしなくなつたら

私は私を褒めて涙し

私は私に帰るだろう

それまでは努力しない私自身を

終わりと続きの境界線であがいていなければ

手を伸ばして気付いた

私が持つ世界はとっくに大きくなる準備を終えていたのだと

私が未だに追いつけないだけで

気づき（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
自分に対する見方は人それぞれ。もちろん他人に対しても。

2011/11/18

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5170w/>

詩集 ~気分のままに書かれるもの~

2011年11月24日09時47分発行